



真宗新書

はじめての仏教学——
ゴータマが仏陀になった

宮下晴輝

Miyashita Seiki

はじめての仏教学——ゴータマが仏陀になった

もくじ

第1章

仏教が成立した時代と背景…………… 7

お釈迦さまはどんな人だったのか?…………… 8

お釈迦さまが生きた時代と社会…………… 16

沙門の時代…………… 24

第2章

青年ゴータマの問い…………… 33

青年ゴータマの出家―四門出遊の物語…………… 34

老病死―仏教の問題領域…………… 42

無常を知る…………… 51

第3章

歩み出した沙門ゴータマ…………… 61

出家する心…………… 62

沙門ゴータマの苦行…………… 72

苦行の放棄…………… 81

第4章 ゴータマが仏陀になった……………91

菩提樹下での思索……………92

仏陀ゴータマ……………103

第5章 仏陀の説法……………113

初転法輪に向って……………114

最初の説法……………124

無我の教説……………135

第6章 心をつにして歩む者たちの集い……………145

仏法僧—三宝……………146

仏弟子たち……………156

仏弟子の信仰……………167

四姓平等……………177

第7章

大般涅槃と經典の編纂……………187

晩年のお釈迦さま……………188

大般涅槃……………197

阿含經の成立……………207

あとがき……………217

第1章

仏教が成立した時代と背景



お釈迦しゃかさまはどんな人だったのか？

はじめに

仏教とは何だろうか。誰しもがこんな疑問を抱いたことがあるのではないだろうか。しかしまた、仏教はとても身近にあるようだけど、自分には特に信仰があるわけではないし、生活するのに仏教がなくても何もさしさわりがない。現代人の多くはこんなふうに考えているようにも思います。

確かに、「地獄」と「極楽」、あるいは「坐禅」と「念仏」といったように、私たちは多くの仏教の言葉を知っていますが、本当にそれらが何を意味するのかを理解している人は少ないのではないのでしょうか。またその一つひとつの意味を調べてみても、とても難解なように思われ、この現代の生活にとって関係があるの

だろうかと思つてしまします。

本書では、仏教の基本的な思想とは何かということ、その源にまでさかのぼって、現代人の一人としてどう関係しているのかということを探ねてみようと思ひます。そして今日にいたるまでの歴史的経緯について学ぶための視点を得ることができればと願つています。

「ぶつだ仏陀」という言葉の意味

まずは「仏陀」という言葉について述べたいと思ひます。当然「仏陀」という言葉自体は誰でも耳にしたことがあるかとは思ひますが、この言葉が一体何を意味するのかあらためて考えるとなかなか難しいかもしれませぬ。

「仏陀」という言葉は、「目覚める」という動詞があつて、その過去分詞形です。ですから意味としては「目覚めた人」ということです。「目覚める」という

言葉自体は難しくありませんが、お釈迦さまが「仏陀」、つまり「目覚めた人」と呼ばれたのはどのような意味なのでしょう。このことが問題なのであって、単に言葉の意味を知ったとしても、仏教について何かがわかったことにはならないのです。

お釈迦さまと家族の名前

「仏陀」の意味をさらに尋ねる前に、お釈迦さまとその家族について私たちが使っている言葉を整理しておきましょう。

まず「釈迦」（サーキヤ）というのは、釈迦族という部族の名前です。そして「釈迦牟尼」（サーキヤムニ）ですが、牟尼とは「尊者」を意味するインドの言葉を音写したもので、「釈迦族出身の尊者」といった意味であり、それを省略した呼び名が「釈尊」です。続いて、あまり使いませんが「瞿曇」という名前もあ

ります。この名前は、お釈迦さまのファミリーネームである「ゴータマ」を音写した言葉です。これに対して、名を表わすファーストネームである「悉達多」(シツダッタ)と呼ばれることもあります。

次にお釈迦さまの家族を表わす言葉ですが、「浄飯王」(じようばんおう)（ストドーダナ）というのはお釈迦さまの父親です。名前に「王」とついていますが、大きな権力者というよりは、部族の長というぐらいの意味です。そして、お釈迦さまの母親は「摩耶夫人」(まゑにん)（マヤー）と言いますが、この方はゴータマを生んで一週間後に亡くなっていてるので、その後実際にゴータマを養育されたのが、摩耶夫人の妹である「摩訶波闍波提」(まかはじやほだい)（マハーパジャーパティ）です。

以上のようにお釈迦さまの家族を紹介してきましたが、お釈迦さまは部族の長の息子として生まれた、私たちと同じ一人の人です。この人が後に「仏陀」、つまり「目覚めた人」となったのです。ここで押さえておきたいのが、「ゴータマ」

と「仏陀」の関係です。まず「ゴータマ」というのは人の名前であり、固有名詞です。しかし「仏陀」は固有名詞ではなく、「ゴータマが仏陀になった」というように使われる普通名詞です。固有名詞には意味がなくてもよいのですが、普通名詞である「仏陀」は先ほど確認したように「目覚めた人」という意味をもった言葉なのです。

お釈迦さまが生きた時代

もう一歩踏み込んで考えると、「仏陀になった」とは、つまりどうなったということなのでしょう。古代インドの人たちは「仏陀」という言葉をどのように使っていたのでしょうか。また、なぜ仏陀になろうとしたのでしょうか。目覚めた者というけれど、何に目覚めたのでしょうか…、というようにさまざまな疑問が湧いてきます。そういうことを含めて、「ゴータマが仏陀になった」とはいっ

たい何を意味するのか。これが「仏教学」の課題なのです。

こうしたことを尋ねていくためには、まず一つにはお釈迦さまが生きた「時代」を考える必要があります。お釈迦さまが生きたのはいつの時代なのか、その場所はどんな地域だったのか、その時の文化・思想・宗教がどういったものであったのかについて、大まかにお話したいと思います。そしてそのような時代の中でゴータマという青年が、なぜ二十九歳で出家し、仏陀になったのかについて考えていこうと思います。

お釈迦さまの生存年代については、よくわかっていません。中国にはずいぶん古い歴史書がありますが、インドにはあまりないのです。インドの歴史については、インドで最初の大きな統一帝国・マウリア朝の第三代目の王であるアショーカ王という人が、文字を石柱に残しています。文字自体はこれより古くからありますが、はつきりと現存している文字としてはこれがインドの歴史の中で最も古

いと言ってよいでしょう。この石柱を手掛かりに、アシヨーカ王が即位したのは紀元前二六八年であろうと言われています。さらに、アシヨーカ王が即位したのは、仏陀ゴータマが入滅してから約百年後、あるいは二百年後と伝承されています。百年後と二百年後、どちらの説が正しいかについてはまだ定説がありませんが、ここではお釈迦さまが生きたのは紀元前五六六〜四八六年という説を採用しようと思います。

お釈迦さまが生きた地域

次に場所についてです。お釈迦さまにまつわる聖なる場所として、四つの場所がよく挙げられます。(1) ルンビニー：お生まれになった場所〈誕生〉、(2) ブツダガヤー：覚りをひらかれた場所〈成道〉、(3) サールナート：初めて説法された場所〈初転法輪〉、(4) クシナガラ：生涯を終えられた場所〈入滅〉、で

す。仏教はこの四つの場所を「四大聖地」としてとても大切にしてきました。

ルンビニーの西にカピラヴァストウがあります。これが釈迦族の町です。そしてルンビニーとは森の名前で、現在のネパール側の国境辺りです。次にブツダガヤーは、ガンジス川の中ほどの南側にあります。その次に、初転法輪の場所であるサールナートは、ベナレスの町の近くです。そして釈迦さまが生涯を終えられたクシナガラは、ルンビニーの南にある地です。このようなガンジス川中流域の地域を、お釈迦さまは青年期から老年期に至るまで歩まれたのです。その距離を正確に示すのは難しいのですが、ブツダガヤーからサールナートまで直線距離にすると二三〇kmぐらいになるでしょう。

ここまでの話で、釈尊の生きた時代は紀元前六世紀から五世紀、場所はガンジス川中流域であると大まかに理解していただけたのではないかと思えます。

お釈迦さまが生きた時代と社会

古代インドの宗教

次に、お釈迦さまが生きた時代の文化・思想状況や社会のありようを考えてみましょう。

紀元前六世紀から五世紀のガンジス川中流域というのは一体どういう社会で、どんな時代だったのか、歴史の中における特徴、どのような背景があつて仏陀が生まれたのかを、少しさかのぼって考えたいと思います。

ヒマラヤ山脈からは数えきれないほど多くの川が流れ出て、インダス川やガンジス川となって海へと向かいます。

インダス川流域に、紀元前三三〇〇年頃から一八〇〇年ぐらいまで、世界四大

文明の一つであるインダス文明を築いた人たちがいたと考えられています。どう
いう人たちであったかは、はっきりとはわかっていませんが、その都市文明が突
然に滅びてしまったようです。その後、紀元前一五〇〇年ころから、自分たち
を「アーリア」と呼んだ民族が、この場所に新しく西から移り住んできました。
「アーリア」とは、高尚という意味です。彼らは遊牧民でしたが、徐々に農耕生
活を始め、定住していくこととなります。

アーリア人は、馬に乗って牛を追う半遊牧半農耕の生活をし、居住地を拡大し
つつ、またその土地の人々を征服し、東へ東へと彼らの社会が拡張進展してい
きました。最初は、紀元前十世紀ころまでにインダスの上流域のパンジャーブ地方
(五河地方) に定着しますが、紀元前八世紀ころにはヤムナー川とガンジス川の
二つの川に挟まれたドゥアーブ地方(二河地方) が中心になります。この時代
に、今日にまでいたるインドの社会制度が成立します。

どこの民族でも基本的には変わりませんが、古代インドの宗教においても、太陽や雨のような自然の力を神として仰ぎました。またそれらは擬人化されて、その神々の活躍についての物語を歌い讃えるのですが、それは当然自分たちの部族の繁栄や恵みを神々に祈るためのものという、素朴なものです。この神々への讃歌を編纂^{へんさん}し、それを聖典としてずっと伝えていきます。一番古いものはリグ・ヴェーダで、リグとは讃歌という意味です。この中で一番活躍する力のある神さまはインドラという名前で、日本や中国では帝釈天^{たいしやくてん}という名前で伝わっています。この帝釈天が、アスラ（阿修羅^{あしゅら}）という悪い神々と戦ったという物語が作られます。同じアリア人でもイランに入った人たちは、ペルシア人ともいますが、彼らにとっての最高神・善神の名はアフラ・マズダといい、インドの悪神・アスラと言葉は同根ですが、意味は正反対です。

祭式中心の部族社会

最初の聖典が成立してから二百年ほど時代が下がって、紀元前八世紀ぐらいのドウアーブ地方では、神々を祀^{まつ}るための儀式が重要な意味をもつようになり、戦争するには、どのような神を祀^{まつ}ってどのような歌を歌うのかとか、結婚式や葬式の儀式など、部族のあらゆることが儀式によって決定されていくような祭式中心の部族社会が生まれてきます。

さらに新たな社会制度も生まれてきます。カースト制度という言葉はご存知かと思いますが、ブラーフマナ（婆羅門^{ぼらもん}、司祭者^{しさいしや}）、クシャトリヤ（刹帝利^{せつていり}、戦士）、ヴァイシヤ（吠舍^{べいしや}、庶民）、シュードラ（首陀羅^{しゅだら}、隸民^{れいみん}）という四つのカーストがあります。前の三つはアーリアであり、最後の四番目は非アーリアとされます。これは征服した側と征服された側の区別になります。そしてこの身分制度

はインドではヴァルナ制と呼ばれています。ヴァルナとは、本来は膚の色を意味して、それによって差別したのだと考えられます。これを、後にヨーロッパの人がやってきて、インドのカースト（階級）制だと言ったのです。

祭式が次第に複雑になり、それを専門とするには世襲の司祭者たちが必要になります。それがブラーフマナと呼ばれる階層を作ることになります。また、部族間の戦争のための戦士たちはクシャトリア、農民や職人などの一般の人びとはヴァイシャ、さらに隷民とされた人びとはシュードラと呼ばれました。

そして、神々に仕えるブラーフマナが最も清浄な生まれの者であり、それ以下になれば不浄となり、シュードラは最も不浄であるという価値づけをしました。しかも、このような最清浄であるブラーフマナを頂点とするヴァルナ制の秩序をさらに強く維持するために、四つのヴァルナ制の外側に、最不浄のチャンダーラと呼ばれる賤民せんみんをもうけました。紀元前八世紀ころにはすでにこの名前が出てき